

ベトナム・ソンラーにおける地域文化の再編 -タイ文化のキン化をめぐって-

樫永真佐夫

1 はじめに

本稿は、ベトナム西北地方ソンラーを中心とする地域文化の再編について考えるための序論である。

ソンラーは多民族性で知られる。植民地期まで当該地域で支配的であったタイをはじめとして、キン（現ベトナムの多数民族）、モン、ムオン、ザオ、コム、シンムン、タイ、漢族、カーン、ラハー、ラオなど多民族が居住している。したがって2005年に出版された地誌『ソンラー省 110年（1895-2005）』（Tỉnh ủy, Hội đồng nhân dân, Ủy ban nhân dân tỉnh Sơn La 2005: 33-41）にも、省の住民構成、歴史、文化の顕著な特徴を形作っているとして、まず紹介されている。

ベトナムにおける国民化の進展、人口移動、物資流通の迅速化や情報化の波の影響で、ことに1990年以降、急速にソンラー市の都市化が進展している。ソンラー省全体ではタイが最も人口が多54%を占めているのに対して、ソンラー市内に限ると、いまやキンが70%を占めている¹⁾。これと平行して、ソンラー市内に住む少数民族（キン以外の諸民族）の衣食住のキン化（ベトナム化）も急速に進んでいる。本稿では、とくにソンラー市内に住むタイに焦点を当て、タイのキン化の様子を示したい。

2, ソンラー市内のタイ家族

以下の記述は、ソンラー市に住む2家族からの聞き取りに基づいている。ソンラー省マイソン県生まれのCT（1934-2007）の長女の家族と、長男の家族である。

CTは、マイソンのタイ首領一族の家に生まれ、妻CCはソンラーのムオン・チャイという地域を統括していた首領一族に生まれた。娘3人と息子1人、あわせて4人の子にめぐまれ、そのうち長女CNの家族と、2番目の長男CThがソンラー市に住んでいる。CCはCThの家に同居している。3番目の娘CLは、ハノイで学校の先生をしていて、キン出身の航空会社勤務の夫とベトナム式の生活をしている。末の娘CPhは、1954年以前にソンラー

からフランスに亡命したタイ首領一族の末裔と結婚し、フランスのリヨン市に住んでいる。ここで取り上げるのは、長女 CN と長男 CTh の家族の衣食住である。

2.1 CN 家族構成

長女 CN はソンラー省の病院の小児科医で、夕方以降は市内中心部にある自宅で小児科のクリニックも開設している。夫もソンラーのタイ首領一族の末裔で検事である。ハノイの専門学校を卒業した 23 の長男と、高校生の次男（2009 年現在）、70 歳を超える夫の実母の 5 人家族である。

2.2 CTh 家族構成

一方、長男 CTh は、省人民委員会の役人で、タイビン省出身のキンの女性と結婚し、男の子二人をもうけた。その長男はハノイの大学を昨年卒業し、ハノイで働いている。次男はソンラー市の小学校に通っている。長男の母 CC も同居している。こちらも自宅は市街地内にあり、道路に面した間口で、衣料品や小物などを販売している。

本稿では、上記 2 家族の例を取り上げる。いずれもフランス植民地期（1945 以前）にソンラーで生まれた第一世代、ベトナム民主共和国期（1946～1975）にソンラーで生まれた第二世代、ベトナム戦争後（1975 以降）にソンラーで生まれた第三世代の、3 世代同居家族である。

図 1 CTh の家族構成

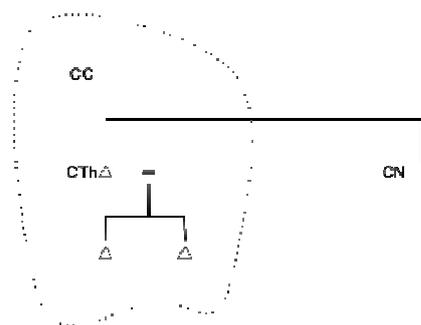


写真 1 : ソンラー市内の家屋

3. 家庭内での 2 言語使用

ソンラー市は、現在、都市化の進展のまっただ中にある。1990 年代以降、急速な市場経

済化が進展し、物資・情報・人の移動が加速度的に量を増している。電力供給の安定と、急速な工業化の進展を目指すベトナムは、北部地域における電力生産を増大させるため、完成すれば東南アジア最大となる第二ソンダーダム建設(最大出力2400メガワット)を2003年に着工した。ソンラー市がこの大規模建設事業の一大拠点であり、道路が拡張して、交通量が増加し、高層建築が次々建設されて、街の景観も急変しつつある。同時に、市内に住む少数民族の人々のキン化もますます進んでいる。彼らの文化継承の現状を、上記CN家族とCThの家族に視点を密着させて、以下では報告する。まずは、言語面についてである。

CN家族とCTh家族ともに、日常的に家庭ではベトナム語とタイ語（黒タイ語）の両方を使用している。ただし、家庭内の使用状況については若干異なる。

3.1 CN家族の言語使用

CN夫婦の場合、ともにタイなので母語はタイ語だが、6歳からずっとベトナム語のみで学校教育を受けた。2人とも職場では日常的にベトナム語を使用しているし、とくにCNの夫はハノイの大学を出ているので、夫婦の会話でも、ベトナム語とタイ語の両方が用いられる。CNの夫の母はベトナム語も話せるし、読み書きもできるが、タイ語を理解する人と話すときは、すべてタイ語を用いている。そこで、彼女がCN夫妻に話しかける場合はすべて、タイ語である。しかし、彼女の孫たち、すなわちCN夫妻の息子2人は、タイ語は聞いて理解できるが、ほとんど話さない。CN夫妻や、CNの夫の母は、彼ら2人に、タイ語で話すこともあれば、ベトナム語で話すこともあるが、彼ら自身は、いずれの言語を耳にしても、すべてベトナム語でこたえる。

3.2 CTh家族の言語使用

一方、CTh夫婦の場合、CThは母語がタイ語だが、妻はタイビン省出身のキンなので、夫婦の間では完全にベトナム語を使用している。CThの母も、CNの夫の母と同じく、ベトナム語も話せるし、読み書きもできるが、タイ語を理解する人と話すときは、すべてタイ語を用いている。しかし、CThの妻はベトナム語を解さないなので、彼女に話しかけるときはベトナム語である。CTh夫妻の2人の息子のうち、すでに成人してハノイで働いている長男は、タイ語を聞いて理解できるが、ほとんど話さない。彼も、CN夫妻の息子たち同様、タイ語で話しかけられても、ベトナム語で話しかけられても、すべてベトナム語でこたえる。小学生の次男になると、タイ語がほとんどわからない。彼が生まれた頃にはすでにソンラー市内の人工の大多数がキンになっていたし、CThの母と同居するようになったのは2007年で、それまでずっと家庭ではベトナム語だったためであろう。つまり、CTh家族の方が、やや言語面におけるキン化は進んでいる。

3.3 ターイ語のキン化、キン語のターイ化

上記のような2言語使い分けは、ソンラー市内のターイ家庭の間で広く進行しつつある。世代間のコミュニケーションのあり方にも、影響を及ぼしている。ターイ語歌謡のラジオ放送やDVD販売などもあるが、日常的に見ているテレビ番組はすべてベトナム語であり、学校、仕事、娯楽などの多くの場でベトナム語使用が優勢になっている。

その一方で、まれにターイ語がソンラーを中心とするベトナム語の単語、声調に影響を与え、ソンラー市を含む西北部で使用される独特のベトナム語を生成させることがある。たとえば、「khong di chu? (行かないよね!）」というベトナム語文の場合、ターイ語に訳すと「bau pay qua?」である。しかし、西北部では「khong di qua?」という言い回しのベトナム語が自然発生しているのである。流れとしては圧倒的にキン化が進行しているが、ターイ化による一種の地方文化の生成がないわけではないことを指摘しておきたい。

4, 食の変化

伝統的にターイはモチ米食であった。ディエンビエンフーの戦いでフランスが完全撤退した1954年から現在までに、キンから導入されたうるち米食がすでに卓越し、モチ米食は従属的になってきた。社会主義化以降の計画経済を進める中で、食糧増産を目的としたもち米作からうるち米作へという農業政策上の転換があったことも大きい。それによって一期作から二期作に転換もできた。

4.1 米食

ソンラー市におけるターイの一般的状況でもあるが、CTh 家族、CN 家族も、ふだんはうるち食が次第に卓越しつつある。しかし、CTh の母、CN の夫の母など、植民地期生まれの高齢者は、もち米のおこわを好む。だから、こういう3世代同居のターイ家族の間では、しばしば炊いたうるちと、蒸しておこわにしたもち米の2種が食卓にあがる。

炊いたうるちの場合、温かいことが大事である。おこわなら、冷えてしまったとしても比較的好いと、ターイの家族は言う。おこわで大事なものは、ねばりっけなのだ。そこでおこわを示す単語には「ねばねば-柔らかい」という形容詞が含まれ、「カウ・ヌン・カウ・ニエウ (khau nung khau nieu)」（ねばっこい蒸した米）や「カム・オン (khau on)」（柔らかい米）とよばれている。



写真2：蒸し上がったおこわ



写真3：米びつ（コム）

蒸し上がったおこわは、蒸し器から盆に出し、竹か、家畜の肩や脇腹の骨から作った箸（may lam）でひっくり返す。うちわですっかり蒸気をとばしてから、コム（com）やエップ（ep）やタウ（tau）などの竹製の櫃にいれる。そのあと、コムやエップやタウを布団でくるみ、食事までおいておく。おこわは、タイにとって、キンと対比される独自の食文化と考えられている。しかも、櫃も彼ら独自の物質文化と考えられ、村ではそうした竹の組み物の制作技術が男性には当たり前の習得技能であった。しかし、CThの息子たち、CNの息子たちは、すでにうるちの方を好んで食べるようになっている。

4.2 おかず

日本と同様、食事は、主食としてのご飯とおかずの組み合わせである。ベトナム語でも、「米とスープは温かい方がいい」と慣用的に言い習わされ、ご飯とスープ（com canh）という複合名詞が食事時に食事一般を示すのに用いられるように、キンはご飯とスープを、あたかも日本人がご飯と味噌汁がセットであるようにして食べる。ソンラー市のタイの食卓でも、うるち食になると、同様である。魚や肉を、炒めたり、あげたり、煮たおかずに加えて、漬け物野菜、魚の干物などの塩漬けなどを食べる。漬け汁には、ヌオック・マム（魚醤）、スタチを搾って塩と唐辛子に調味料から作ったものや、小エビか魚の塩漬け（mam tom, mam, tep, mam ca）などが用いられる。

一方、伝統的なおこわ出食事をするときには、タイ固有のおかずの方があう。タイの一般的な調理は、蒸すこと（nung）、ゆでること（luak）、炭火焼き（chi）、灰燼での蒸し焼き（pho や mok）、炉での炙り焼き（ping や pin）、燻製（dang）、干物（xang）などである。伝統的に、油で炒めたり、揚げたりすることは少なく、これもうるち食と同時に普及したキン化の一端である²⁾。

タイは、キンと異なり、生食を比較的好む。生肉のたたきがラープ（lap）、魚肉のたたきがコーイ（coi）である。血を塩とぬるま湯で固めたゼリー状の料理が、テーン・ルアッ

ト・ター (teng luot ta) で、年祝い、婚姻、葬式などの宴会の際、供犠した動物の地を使ってしばしば食卓に供される。さらに、たっぷりの熱湯に浸しただけの料理オム (om) や、半生の料理ハム・ハン (ham han) も好まれる。

4.3 漬け汁

CN 家族, CTh 家族の間でも、ターイの伝統的なつけ汁チェオ (cheo) がしばしば作られている。チェオの語義は、原材料を溶かすことである。チェオの基本素材は、塩、唐辛子と調味料であるが、おかずにあわせて調味料の調合は代わり、それによってチェオの名も異なる。たとえば、塩と唐辛子とニンニクだと、「香りの根のチェオ (cheo hua hom)」, ホム・ペンという野菜を加えると、チェオ・ホム・ペン (cheo hom pen)。これらは蒸した野菜、ゆでた肉、魚、焼いた肉に用いられる。ゆでた鶏の肝を加えると、チェオ・タップ (cheo tap)。これはゆでた鶏肉を食べるのに用いる。照り焼きにした魚を入れたチェオは、森に自生する生野菜マ (ma) をつけるのに用いる。

チェオ以外に、各種のシカ、水牛、牛、山羊など草食動物の新鮮な内臓の内容物から作った漬け汁もある。これに、塩、唐辛子、山椒と、ショウガ、香草の根、ニンニクなど他の調味料を注ぎ入れ、煮て作ったのが、ピア (pia) あるいは、ナム・ピア (nam pia) である。これに、肉や、ラープにしたタタキの肉をつけて食べる。ナム・ピアは、苦くて香ばしく、うまみを補う。

このように、ターイの伝統食には、塩以外に、唐辛子、山椒、ショウガ、ネギ、香草の根、ウコン、香草、ホム・ペン、タデ、各種ハッカ、山で採集できる野菜がふんだんに用いられている。キンの食の場合、油料理が贅沢だが、ターイの食では、脂っこさは嫌われ、香ばしさ、辛さ、酸っぱさ、苦さが重視されると CTh の母 CC は言う。しかし、こうした料理の好みにも世代間の差があり、彼女の孫の世代になると、キンの料理を好む。したがって、CTh 家族、CN 家族のふだんの食卓に、おこわ、炊いたうるち米に、炒め物を中心とするキン式のおかずと蒸したり焼いたりゆでたりしたターイ式のおかずの双方が並ぶことも珍しくない。

4.4 飲料

飲み物については、CTh 家族、CN 家族ともに、ふだんは水や茶を飲むことが多い。伝統的に、ソンラーのターイは茶をめったに飲まなかった。喫茶もキン化の一つとして理解できる。客人を歓待するのに、伝統的には、まず米の蒸留酒でもてなした。しかし、現在では、まずお茶でもてなすことが多い。ただし、キンの間では、苦みの強いタイグエン産の茶が好まれるのに対して、ターイの間では、モクチャウの薄い緑茶が好まれる傾向がある。

ターイは、蒸留酒と発酵酒の双方を飲む。発酵酒を、ラウ・サーと呼ぶ。ラウは酒、サーは、モン・クメール語系やカダイ語系などの中腹民の総称である。発酵酒は、中腹民の酒として理解されていたのかもしれない。冠婚葬祭、年祝い、治療儀礼など各種儀礼では、お供えとして、宴席の飲料として蒸留酒は不可欠である。



写真4：新年の儀礼のときの食事は、ターイ式のおかずが並ぶ。ゆでたタケノコ、ゆでたブタなどの他、中央の鉢に入ったのがチェオ



写真5：新年の宴会で、発酵酒ラウ・サーを飲む

5、衣装の変化

ベトナムの写真やテレビなどのメディアで、少数民族固有の衣服は各民族の固有性を示す代表的なものである。同時に、それが手作りであることは、少数民族の自給自足生活というイメージを喚起させる。ターイの場合、黒か濃紺の筒型スカートに、蝶々型の銀ボタンが中央に並んだ立て襟のシャツ、頭にはピョウ (pieu) という頭衣をかぶった女性の姿が、その典型的なものである。こうした民族衣装を日常的に着ている女性に村の中で出会う。織り、藍染め、刺繍も農閑期に多い女性の労働として維持されている。実際には、市販のプリントシャツを導入したり、中国製の化繊の布から仕立てた筒型スカートを着ていて、完全な手作りではないがと、形態には伝統が比較的維持されている。また、既婚女性は、

タン・カウ（tang cau）と世ばれる独特の髷を結う。一方、男性はしばしば洋ズボン、Tシャツやプリントシャツなどを着ている（樫永 2005）。

CNの家族やCThの家族の場合、CNの夫の母、CThの母CCは、タン・カウを結っている。蝶々型の銀ボタンが中央についた立て襟のシャツやピョウは、儀礼のとき以外身につけないにしろ、筒型スカートを日常的に着用している。しかし、CNのように、ソンラー市内の病院で勤務しているような女性の場合、タイであっても、ふだんから洋装（キンと同様、スカートよりもズボンがふつう）で、タン・カウの髷も結っていないのがふつうである。一方、CNの夫、CThなど男性は、タイの伝統的な黒い藍染めのシャツとズボンをまとうことはまずない。ふだんから洋装で、その子の世代も同様である。



写真6（左）：タン・カウを結び、筒型スカート姿のCC。その右は孫たち。



写真7（右）：伝統的な男女の衣装

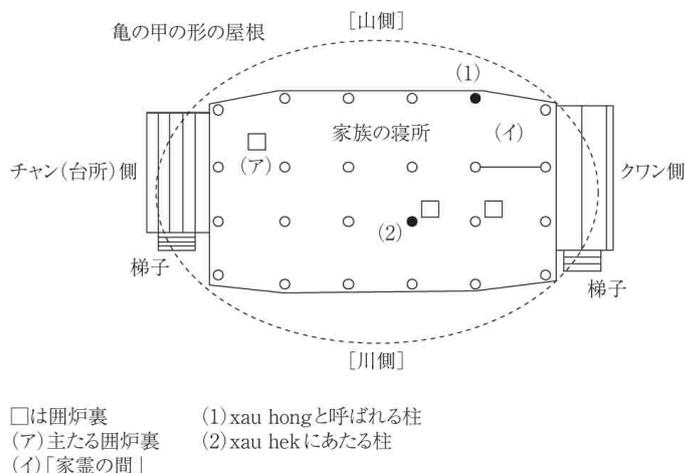
6. 住空間の変化

1990年代半ばまでは、ソンラー市内中央部にも、タイの伝統的な木造高床家屋が見られたが、市内の国道沿いの家屋はみなセメント建築になっている。土間式で、ウナギの寝床式に間口が狭い、3階建てくらいのキン式の家屋である。CThの家、CNの家、いずれも後者のキン化した建築である。

ここで、伝統的なタイの建築の空間配置について、簡単に説明しておこう。

ソンラー付近のタイ（黒タイ）は、盆地縁の山麓に沿って家を建てる。その内部は、田んぼや川がある側に面した「下側」と山側の「上側」、さらには祖先を祀る「家霊の間」がある「クワン側」と炊事洗濯のテラスがある「チャン側」という2方向から区分される。日常生活の中で、下側と上側は、それぞれ「夜の領域」と「昼間の領域」であり、クワン側とチャン側は、「公的領域と私的（家族の）領域」あるいは「男性の領域と女性の領域」として用いられている。

図2 ターイの伝統家屋の内部（樫永 2009：122）



1998年にトゥアンザオ県で作成したターイの家（図2）を用いて説明すると、中央を境にして左がクワンで右がチャンである。女性たちが炊事、洗濯、染め物を行うのはチャン側のテラスであり、家族や村人はチャン側のテラスからふだん出入りする。いっぽう、クワン側の梯子は、公的な用事で訪れる客や、姻族を招き入れる場合に用いられる。クワン側にある囲炉裏も、客人のためのもので、家族の食事はチャン側で行われるのに対して、客人を招いての食事はクワン側で行われる。ふだんは、クワン側のベランダで、男性が竹細工の籠や筵などを作ったり、網を編んだりしてする。

上側（山側）の一方の端に「家霊の間」がある。「家霊の間」は、亡くなった父系祖先のための部屋である。亡くなって、天上世界にのぼった祖先を、10日に一度お供えをしてここに招く。このお供えをパット・トンという。その際、米、肉、酒などをお供えする。肉は、魚か鶏かブタか水牛の肉で、鶏卵でもいい。また、結婚や新築などのお祝い事、葬式、新年のお祝いなどにも、お供えをし、祈禱する（樫永 2009、印刷中）。このように、伝統家屋の内部配置は定型的であり、家族の行動様式、住まい方も規定している。

一方、キン式の家は、山側、川側に沿って、明確に家屋の内部配置が決まっているわけではない。一回の間口に近い応接間が公的領域、その奥にある台所が女性の領域という程度のことは言えるが、住まい方はほとんど家族の恣意に委ねられている。家霊の間もなく、かわりにキン式の祭壇を、最上階の部屋に置いて、位牌、香炉、遺影、線香を壇上に安置している。ふつう、家霊の間に何もおかないのとは対照的である。祖先との関わり方も、キン化による変化を受けるのである。



写真8（左）：新築の棟上げ祝いのお供えをした「家霊の間」



写真9（右）：CTh氏宅の祭壇。

7. まとめ

本報告では、ソンラー市内に住むタイの CTh 家族と、CN 家族の例をあげ、そのすまい方が都市化とともにキン化しつつある実態の一端を示した。言語、食、衣服、居住空間に焦点を絞ったが、ここからわかるように、タイ家庭においては、世代間の齟齬をほらみながらキン化は明確に進展している。しかも、それは単に物的な表層の変化にとどまらず、祖先祭祀のような精神現象の深層でも進行している。

都市化による物的変化に伴って、観念、価値観などがどのように変化して、新しい地方的世界が生成されていくのかは、今後の課題である。

[注]

1) ソンラー省の面積は、14,174.4 km²、人口：1,007,700 人、人口密度：71/km²。12 民族が居住する（タイ 54%、キン 18%、モン 12%、ムオン 8.4%、ザオ 2.5%）。市内人口の 70 パーセントがキン族。20 パーセント以上がタイ（出典：ソンラー省ウェブサイト <http://www.sonla.gov.vn/sonla/Vietnam/GT/>

ベトナム国家統計局 <http://www.gso.gov.vn/default.aspx?tabid=387&idmid=3&ItemID=6156>)

2) カム・チョン「少数民族の衣食住の都市化-ソンラー市のタイを例に」『(国立民族学博物館公開フォーラム) ベトナムにおける都市化と伝統文化の変容』(国立民族学博物館, 2004 年 11 月 29 日) の発表原稿参照。

[文献]

樫永真佐夫 2000 「高床式木造家屋-トゥアンザオ県の黒タイ村落から」ベトナム協会編,

『ベトナム』1999-3号, 16-32頁.

檜永真佐夫 2005 「黒タイ-黒タイの拡散とその現在」, 綾部恒雄監修 林 行夫, 合田
濤編『講座世界の先住民族 ファースト・ピープルズの現在2-東南アジア』明石書店,
123-139頁.

檜永真佐夫 2009 『ベトナム黒タイの祖先祭祀-家霊簿と系譜認識をめぐる民族誌』風響
社

檜永真佐夫 印刷中 「ベトナム, 黒タイの<亀の甲>型の家」『ヒマラヤ学誌』11号
Tỉnh ủy, Hội đồng nhân dân, Ủy ban nhân dân tỉnh Sơn La, 2005, *Tỉnh Sơn La 110 năm (1895-2005)*,
Nxb Chính trị Quốc gia